

「China-free」を中心とした接辞表現の認知言語学的分析

A Cognitive Linguistic Analysis on Affix Expressions : An Example of “China-free”

有 光 奈 美

(Nami Arimitsu)

「China-free」を中心とした接辞表現の認知言語学的分析

有 光 奈 美

- I. はじめに
- II. 「China-free」という表現の生まれた背景
 - 1. 社会的背景
 - 2. 具体的報道と消費者心理
- III. 認知言語学から見た否定表現と対比表現
 - 1. 否定と対比の関係
 - 2. 否定と対比に関する接頭辞の用例
 - 3. 否定と対比に関する接尾辞の用例
- IV. 新しい表現の出現における動機付けと認知言語学
 - 1. 「China-free」に見られるメタファー
 - 2. 「China-free」に見られるコンストラクション
 - 3. 「X-free」「X-less」「non-X」に関する一般化
- V. おわりに
- 参考文献

I. はじめに

これまでの言語学における意味論の研究は、語彙の字義通りの意味構造と、これらの語彙を構成要素とする文に関する字義通りの意味構造の分析が中心的な問題となっている。こうした従来の意味研究においては、抽象的な記号操作による分析が重視され、言葉の創造性を反映する転義や、概念の拡張にかかわる意味構造の解明は、充分にはなされていない。

筆者は本研究において、日本語と英語に見られる「China-free」という表現を中心に、認知言語学の方法を用いることによって、接辞表現と新しい表現の出現における動機付けを解明していく。

西洋を中心とする伝統的な科学観においては、客観主義的な世界観が存在していた。そこでは、認知主体としての理性的な側面が重視されてきた。客観主義的なアプローチにおいては、思考、推論、言語等に関連する知的な活動について、抽象的な記号操作による分析が与えられてきた。記号の意味が認知主体とは独立に存在するような客観的な世界が、分析対象とされてきたのである。

従来の言語研究においては、知・情・意のうち、特に知の側面に焦点があてられ、中でも統語論、シンタクスといった文法的な要素を研究の中心として扱うことが主流となっていた。

20世紀半ばに Chomsky によって変形・生成文法が提唱され、そこでは言語能力の独立性、先天性、普遍性が強調された。初期の生成文法においては、抽象的な記号操作に注目し、それが統語構造を作り出していると考え、この統語構造を作り出す過程が人間の持つ言語能力の中心であるという言語観が存在していた。

こうした歴史を背景とした生まれた認知言語学は、認知主体の感性や想像力、主観的な視点、環境との相互作用といったものの重要性を訴えている。認知言語学は、日常言語の構成要素である語彙、構文、概念といったものを安定的な固まった自律的なものとしてとらえるのではなく、主体的で、身体的な文脈に依存しており、動的なものであると考えている。実際の言語使用の場においては、主体の創造的な視点の投影や、視点の転換、主観的なイメージ形成と変容、カテゴリー形成の拡張、焦点化のずれやゆらぎといったものが、言語活動の重要な要素となっていることに注目している。

認知言語学は、伝統的なアプローチとは対照的に、より身体的で、経験主義的で、主観的な側面を持ち、環境による動機付け、言語の相対性に注目し、言語能力は認知能力に依存していることを指摘してきている。言語能力は、人間が持つ他の認知能力と切り離すことができないものである。認知言語学は、抽象的な記号操作に終始するのではなく、その言語使用の基盤となっている人間の認知能力に注目する。すなわち、言語現象を認知能力によって動機付けるという手法を採用する。

認知言語学は、言語能力の解明を通して、人間の思考や心がどのようなしくみであるのか明らかにしていこうとしている。これまでの構造言語学、生成文法等の限界を超え、言語を通じて心の働きを解明するものである。人間の外界認知能力と、言語使用との間における密接な関係を重視し、言語使用の場とその意味を重んじ、人間の認知能力、身体的特性と言語との相互作用に注目する。

本研究は、接辞を認知言語学の視点から扱い、特に「China-free」という表現に注目した。この表現を手がかりに、人間の日常言語の使用における新しい表現の生まれる認知的動機付けを解明する。

II. 「China-free」という表現の生まれた背景

1. 社会的背景

「China-free」という表現は、2007年7月にアメリカ合衆国内で使われ始めたが、そこには、世界的な問題として中国製品や中国産の食品の安全性が問われた背景がある。

「SAFE CHINA FREE (セーフ・チャイナフリー)」という表現を使い始めたのは、アメリカのユタ州にある Food for Health International という健康食品メーカーである。Food for Health International 社は、製品であるビタミン剤などに対して、「SAFE CHINA FREE」のシールを貼り付けて販売し、原材料に中国産を使わず、アメリカ産の果物を使っていることを表現した。食品の安

全性を訴えることを目的としたものであり、広告効果や販売促進を狙っている。

「China-free」とは、中国産食品の問題と、消費者の不安感を背景に、新しく生まれてきた表現であるといえる。「養殖うなぎ等の魚介類から、アメリカで使用が禁止されている抗菌剤が見つかる」、「中国から輸入されたペットフードを食べた犬や猫が亡くなった」、「段ボール入り肉まん」といったニュースがアメリカを中心に世界規模で次々と報じられてきたことに対して、消費者の不安感を解消するために、「SAFE CHINA FREE」のシールを貼り付けて販売することの正当性が論じられるようになってきた (New York Times 2007年7月2日、Reuters 2007年7月6日)。

こうした新しい表現は、安全性を訴えるという目的を持っていると同時に、中国産は危険であるというイメージを必要以上に伝達している可能性がある。そして、本当は危険ではない中国産の製品や食品についてまでも、ひとまとめに捕らえてしまう危険性が存在している。このような一般化が行われている動機付けを、本研究では認知言語学の視点から、論じていく。

2. 具体的報道と消費者心理

中国がペットフードの原料として輸出した小麦粉にネズミ駆除用の毒が含まれていたために、アメリカで販売したペットフードを食べた犬や猫が肝臓の病気で死亡した。2007年3月には、販売元のカナダのペットフード販売大手、Menu Foods 社が6千万缶以上の缶詰を回収した (米国食品医薬品局 New York State, Department of Agriculture and Markets News, 2007年3月23日)。

韓国に輸入された中国産ウナギから、発癌性物質であるマラカイトグリーンが検出された。その後、日本に輸入されたウナギからも同じ物質が検出された。マラカイトグリーンは日本では食品衛生法により合成抗菌剤として定められており、食品中から検出されてはならないはずのものである。(厚生労働省食品安全部監視安全課「中国産養殖鰻のマラカイトグリーン検出について」2005年8月4日)。

中国中央テレビ (2007年7月11日) において、北京市朝陽区の一部の露店にて、段ボールとひき肉を混ぜることによって具を作った「偽装肉まん」が販売されていたことが北京市の工商当局による検査でわかったことが報じられた (京華時報2007年7月12日)。テレビ報道において、ダンボール対ひき肉の割合は、6対4であるなどの具体的な内容が存在していた。しかし、その後、この「偽装肉まん」については、テレビ局の意図的な「やらせ報道」であったことが判明し、中国北京テレビは2007年7月18日にやらせを認め、謝罪した。

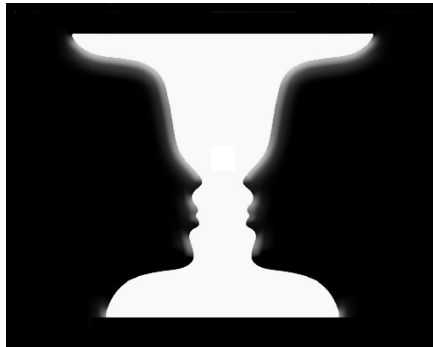
こうした具体的なニュースを背景に、これまでも世界中で多くの製品、食品に関する事故が公表されてきていたものが2007年に安全性を求める消費者の心理と結びつき、特に大きなニュースとして報じられるようになってきた。

Ⅲ. 認知言語学から見た否定表現と対比表現

1. 否定と対比の関係

人間の認知基盤は日常生活の中にある基本的経験によって作られている。認知言語学の視点から対比現象をとらえる際に不可欠なのが、ゲシュタルト心理学の研究成果の一つといわれる図地反転の概念 (Figure and Ground) である。美女と老婆、ルビンの盃といったものが代表例である。

黒い部分と白い部分のどちらに注目するかによって、1つの絵が二つの見え方をする。黒い部分に注目すれば、向かい合う二人の横顔であるし、白い部分に注目すれば、杯が浮かび上がってくる。対比概念は日常言語の中にも頻出している。図と地の分化は、主体となっている人間が主観的に定めている。1つの絵、1つの対象に対して、異なった視点が存在しうることを指摘している図であり、これは人間の認知の傾向が動的に変化しうることを示唆している。



<図1>

こうした視覚的な図地反転を踏まえた上で、言語表現における 図地反転を分析していく。

(1) a. The bike is near the house.

b. The house is near the bike. (Talmy 1978: 627, 2000a: 314)

Figure と Ground の特徴について、Talmy (*ibid*: 315) は以下のように説いている。図 (Figure) においては、未知なもの、動きやすい、小さい、複雑な形、新情報、関心が高い、気づきにくい、気づいた後は目立つ、独立している、といった特徴を挙げ、地 (Ground) については対照的に、既知なもの、動きにくい、大きい、単純な形、旧情報、関心が低い、気づきやすい、気づきやすいが目立たない、背景的従属的といった特徴を挙げている。

否定と対比の関係も、この図時反転を基盤としてとらえることが可能である。否定の一部は、対比の概念に根ざしていると考えられる。つまり、否定は肯定を前提として存在している有標なもの

であり、対比の存在なしに否定を扱うことはできない。

2. 否定と対比に関する接頭辞の用例

対比の概念が否定と結びついていることを踏まえた上で、否定接頭辞が表すことのできる否定性について概観する。日本語では、「不」、「非」、「未」、「無」等、英語では、「un-」「in-」「non-」「dis-」「a-」等の否定接頭辞を用いて、語の打消を行い、否定を表現することができる点に注目する。「ない」という明示的な否定語を用いることがなくとも、否定接頭辞を使用することによって、以下の例文 a と b の間には、肯定と否定の対比が存在している。

- (2) a. この食品は有害だ。
 b. この食品は無害だ。
 c. この食品は有害ではない。

- (3) a. この計画は決定している。
 b. この計画は未決定だ。
 c. この計画は決定していない。

例文 b と c は、ほぼ言い換え可能である。また、否定接頭辞の使用については、「～ない」の使用と照らし合わせて、その否定の強弱に差があることが指摘されている。(山梨 1995:135)

- (4) a. 彼は〔不〕幸せだと思う。
 b. 彼は幸せで〔ない〕と思う。
 c. 彼は幸せだとは思わ〔ない〕。

「彼」の幸せさについて論じれば、(4a)において、彼の幸せさは最も強く否定されている。なぜこのような現象がおこるのか。ここには、「有・無」と「幸せ・不幸せ」というそれぞれの対比に見られる性質の違いが存在していると考えられる。

さらに、語の要素を下のように分析することによって、語の中に含まれている内在的な否定性を現すことも可能である。

- (5) He is unmarried. (He is not yet married. He is a bachelor.)

bachelor [+human, +male, -married]

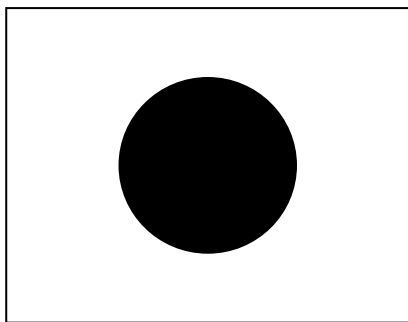
spinster [+human, -male, -married, -young]

このような分析によって、否定性の種類の多様性をより明らかにすることができる。その他の否定関連の接頭辞としては、in-/ ex- (in/out), inter-/intra-, extra-, contra-, ant-, de-, an-, re-, ab-, ob-, pre-/post-, retro- prim-, pro-, mis-, down-, over- (super-, ultra-), sub-, under- by-, semi-, half-, pseudo-, mal- 等が挙げられ、そこには内外、前後、先後、上下、半分、反対、逆、偽、悪い、といった概念を基盤とした否定性が存在していることを指摘できる。これらの否定性の性質は多様であり、空間認知に根ざしているものもあれば、論理的で抽象的な記号操作的な否定性に関連しているものもある。

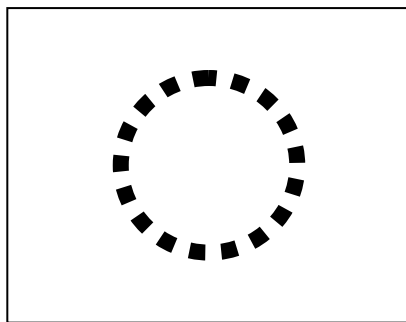
3. 否定と対比に関する接尾辞の用例

un-, in-, non-, dis-といった否定接頭辞ほど多様ではないものの、否定の意味を表すことのできる接尾辞が英語には複数存在している。英語の具体例については、Steven (2002) に詳しい。-ful/-less (harmful/harmless), -free (sugar-free), -let (piglet), -like (ball-like)といった接尾辞が存在している。これらは、日本語の接尾辞としての対応表現を見つけることができないが、接尾辞的に「～に満ちた」「～に欠けた」「～の無い」「～に似た」「本物ではない」といった表現を作ることが可能である。

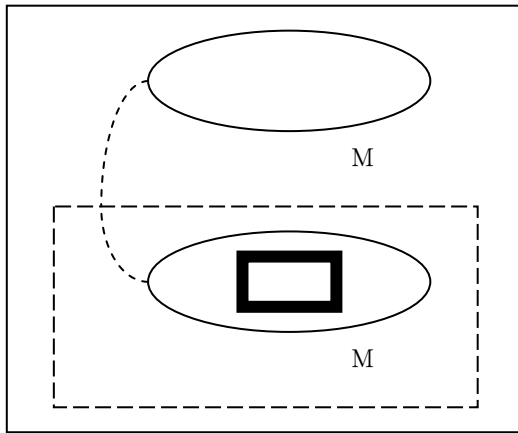
否定には対比の概念が関連していることについて上で触れたが、対比の概念の多くは、人間の空間認知を背景としている。空間概念は人間の身体性に根ざした認知基盤の1つであり、このことは、われわれの日常生活における言語活動に如実に反映されている。接頭辞や接尾辞といった接辞の一部も空間概念に基づいており、イメージスキーマによって統合可能である。内外、上下、遠近等を中心とする対比の概念が、否定の概念と密接に結びついている。いわゆる否定辞を用いた明示的否定文と、否定辞を用いることのない非明示的否定文において、後者の場合、内外、上下、遠近等を中心とする対比の概念の反映が見られるのと同様に、接辞レベルでも、それらの現象を否定文の解釈時に見られる有標性と照らした認知図式により統合可能である。



<図2>



<図3>



Langackerによる否定の認知図式 (1991: 134)

<図 4>

対比の中心となる概念は、ある空間（メンタルスペース、M）にモノが有るか、無いかという認知である。否定の一部をとらえるに際して、ある空間にモノが有ることは肯定であると考えられ、ある空間にモノが無いことは否定であると考えることができる。否定とは、対象がある空間から外に出されたものである。上記の図は、肯定と否定の対比を、空間の内外の概念で示している。否定の基本概念は、存在と非存在の対比によって構成されていることがわかる。存在と非存在という対比の認識が否定の一部を構成している。

本研究で中心的に扱う「-free」は、ある空間にモノが無いことを基盤としている接尾辞であり、これは、明示的な否定辞である「not」や「～ない」が持つ記号操作的な否定性よりも、空間認知に根ざした否定性であると考えられる。

IV. 新しい表現の出現における動機付けと認知言語学

1. 「China-free」に見られるメタファー

メタファー（隠喩）とは、二つの事象や概念の間に類似性が存在している場合に、片方の形式で、もう片方の表現を行うことである。伝統的な言語研究においては、メタファーは、非日常的な詩的なレトリックや飾りのような表現であると軽視され、日常言語とは切り離してとらえられがちであった。しかし、認知言語学の分析手法を用いることにより、従来は見逃されてきた多くの日常言語表現において、さまざまなメタファーが動機付けとして存在しており、メタファーが日常言語に密接に関連していることを指摘できるようになった。

Lakoff and Johnson (1980) が認知言語学におけるメタファー研究の礎であるが、彼らは、メタファーを言語だけの問題としてとらえるのではなく、ある概念領域を別な概念領域を用いることに

よって理解するという認知の営みの中に存在していると説いた。人間の概念体系の多くがメタファーによって構成されており、メタファーによって構成された概念体系が人間の行動様式にも影響を与えていることを指摘した。

「China-free」「China-free」という表現において働いている動機付けは、「価値的に悪いものが存在していない」というメタファーである。

- (6) tax-free
- (7) fee-free
- (8) sugar-free
- (9) care-free
- (10) smoke-free
- (11) barrier-free
- (12) alcohol-free

上記のような表現において、「名詞 (N) -free」の前に入るものは、名詞であり、この名詞の位置に入るものには一貫した特徴が見られる。話者や書き手にとって「無いほうがいいもの」「なくなしてほしいもの」「価値的に悪いもの」が入るという傾向が存在していることがわかる。

「-free」は接辞レベルであるが、「free」という語レベルの自立語も存在している。「free」は、形容詞（自由な、自由に～できる、自発的な、おおらかな、率直な、のびのびした）、副詞（自由に、無料で）、動詞（自由の身にする、釈放する、救う、解く、はずす、きれいにする、はらいのける）といった多様な意味を持っており、日常言語に密接な用例も多く存在している。「-free」という接辞レベルの使用においては、この語レベルの意味のうち、「（～から）自由な」という意味に焦点が当てられており、そこから「～を免れた」、「～のない」といった、ある「特定の存在の無」の状態を表現することになっていると考えられる。

日常言語における否定性の基盤の一つとして、空間認知における内・外の概念が重要な役割をになっていることが、これまでの研究で明らかにされてきているが、「これは私の管轄外だ（これは私の管轄ではない）」といった具合に、存在の有無や、内・外の対比の概念といった認知基盤が否定性の一部と関係していることは、日英語において共通している（山梨 2000:159）。つまり、ある特定の空間の内側にあれば、「存在」「肯定」であり、ある特定の空間の外側にあれば「非存在」「否定」であると考えることができる。「-free」はこうした存在の有無や、内・外の空間認知と密接に関連している。「ある特定の空間の外側にある、ある特定の空間から自由な状態にある、そこにはモノが存在していない」ということが「否定」につながっていると考えられる。

綴り上の問題として、「-free」とすることによって、接尾辞化しているが、現在でも「free」が語レベルでも存在していることから、他の否定接頭辞とは相違点があると言える。代表的な否定接頭辞としては、「un-」「in-」「non-」「dis-」「a-」等を挙げることができるが、これらは、接辞レベルしか存在していない。そして、「-free」が空間認知に密接に関連しているのに対して、「un-」「in-」「non-」「dis-」「a-」等は、記号操作的、論理的、抽象的な打消しの否定性を有していることを、後ろのセクションで詳しく論じていく。

2. 「China-free」に見られるコンストラクション

コンストラクションとは、Goldberg (1995) を礎として、認知文法の枠組みから言語表現をとらえなおすアプローチである。ここでは、構文（コンストラクション）そのものに意味があると考ええる。ある特定の構文を繰り返して使用していくことによって、実際の使用場面を重視した経験的基盤に基づいたゲシュタルトとして、意味と場面が結びつくと考えている。構文を構造化されたカテゴリーであると考え、その構造には拡張事例が見つけられる。典型的な構文から構文的拡張へというプロトタイプ構造が、構文間の関係に存在し、構文同士がネットワークを形成している。

本研究で扱っている「China-free」には「名詞 (N) -free」というコンストラクションが存在している。ここで、明示的な否定辞である「No」を用いた用例と照らすことによって、この構文に見られる特徴を明らかにしていく。

(13) a. No Smoking

b. Smoke-free

日本語で「禁煙」を指す英語の「No Smoking」と「Smoke-free」については、「No Smoking」が、行為の禁止を明示的に表現しているのに対して、「Smoke-free」においては、「煙・紫煙が、無い」というある特定の存在の無を表現している。そして、そこから「煙がない状態」すなわち「禁煙」と考えられる。

(14) No Parking

(15) No Entering

また、「No V (動詞) -ing」については、「No Parking (駐車禁止)」、「No Entering (進入禁止)」のように、行為の禁止が表現される。

「no」は所有に関する否定も行うことができ、「No N (名詞)」の形も可能で、「I have no money.」「I have no time.」のように、ある特定の存在の無を表現することもできるのである。

こうした明示的な否定辞を用いた表現に対して、「N (名詞) -free」の形については、ある特定の存在の無を表現することに特化している。

3. 「X-free」「X-less」「non-X」に関する一般化

代表的な否定接頭辞である「un-」や「in-」は、一般的に形容詞に加えることによって、打消しや否定を行う。しかし、最近では、un-Cola といった表現があることから、名詞（それも固有名詞）に加えることができるようになってきており、「コーラっぽくないもの」「コーラらしくないもの」といった意味を生む新奇な用例が出現してきている。

このように、新語の出現は接辞を伴うものも少なくない。「-free」も生産性を持っている接尾辞であり、「チャイナ・フリー」という表現も昨今のニュースの中で生まれてきた表現である。

本セクションでは、「X-free」「X-less」「non-X」という形式に注目し、それぞれの否定性の相違点についての一般化を行う。「N (名詞) -free」が、ある特定の存在の無を表現することで否定性を表現しており、存在の有無、内・外の空間認知と密接に関連しているのに対して、もう一つの代表的な否定接尾辞「N (名詞) -less」はこの点における認知的な動機付けが異なっている。「-free」は「～から自由な」「～を免れた」「～の無い」という意味で、「ゼロ」を表している。それに対して、「-less」は「sugarless (砂糖のついていない、無糖という意味もあるが、合成甘味料が使われていたり、砂糖以外の甘味が入っていたりもする)」「careless (注意が足りない)」というように「欠けている」という意味になっており、量における大小が否定性の動機付けとなっていることがわかる。確かに、「-less」も「cloudless 雲ひとつ無い」といったように「ゼロ」を表すこともでき、現代英語においても「a year less three days 1年に3日足りない日数」というように「～を減じた、～を除いて」といった動詞的な表現を見つけることもできる。

(16) carefree

(17) careless

「carefree (気苦労の無い、屈託がない、のんきな、楽しい、無頓着な)」に対し、「careless (不注意な、軽率な) (自然な、のんきな、といった意味もあるにはあるが、一般的にその意では「carefree」を好んで使うと考えられる)」となることだけでも、違いを指摘できる。「名詞 (N) -less」では、存在の量の大小を問うているところに動機付けが存在しており、その名詞の位置に入るものについて、「名詞 (N) -free」に入る名詞のように、話者や書き手にとって「無いほうがいいもの」「なくなってほしいもの」「価値的に悪いもの」が入るという傾向が存在していないことがわかる。「名詞 (N) -less」では、そこに価値的なメタファーは働いていないと考えられる。

さらに「Non-X」という形について考察すると、「non-」は欠如を表すという点において、「-free」と似ている点があるが、「non-alcoholic」「non-Japanese」「non-Catholic」「non-fiction」というように名詞だけでなく、形容詞、副詞にも加えられることができる点が異なっている。「-free」は名詞につけられるだけである。そして、「名詞 (N) -less」と同様、そこに価値的なメタファーは働いていない。

(18) nonsocial 社会的でない (その性質が、完全に無い)

(19) unsocial 非社会的な

(～でない、very happy, happy, normal, unhappy, sad といった程度性の喚起)

(20) antisocial 反社会的な (反)

上記のように、否定に関する接辞はその否定の性質において様々に違いがあるが、「-free」は、空間認知に根ざした「ある特定の存在」の有る無し、内外の対比概念を否定性の基盤としており、その「ある特定の存在」を表す名詞については、話者や書き手にとって「無いほうがいいもの」「なくなってほしいもの」「価値的に悪いもの」が入るという傾向が存在している。

このことから、「-free」という接尾辞を加えることによって出現した新しい表現が、明示的な否定語である「no」や、明示的な否定接頭辞である「un-」「in-」「non-」「dis-」「a-」等とは性質の異なる非明示的な否定性を有していることを明らかにした。

V. おわりに

筆者は本研究において、日本語と英語に見られる「China-free」という表現を中心に、認知言語学の方法を用いることによって、接辞表現と新しい表現の出現における動機付けを解明した。

「China-free」という表現について、以下の3点を明らかにした。第一に、「No」という明示的な否定辞を用いた直接的で強い禁止表現ではなく、「-free」という非明示的な否定性を表す接尾辞を用いて、婉曲的な禁止を表現することができ、対外的な配慮を見せられることを指摘した。第二に、「-less」では「少ない」「足りない」「欠けている」といった意味を含意する可能性を持つため、適さないことを明らかにした。第三に、「N (名詞) -free」は、「N が無い状態」を表し、文脈にもよるが、N には、自由になりたいもの、逃げたいもの、なくなってほしいようなものが入ると考えられ、N から自由であることは、すなわち「良い状態」と成り得ることから、「N (名詞) -free」は、「No V (動詞) -ing」のような明示的な禁止表現ではなく、ある特定の無くなって欲しいような存在の無という意味を含意する可能性を持つため、伝達内容は禁止であるにもかかわらず、前向きで積極的な表現と感じられることを明らかにした。

本研究は認知言語学の枠組みに基づき、抽象的な記号操作による分析客観主義的なアプローチを超え、言語使用の基盤となっている人間の認知能力に注目し、非明示的な否定性が「China-free」という表現に存在していることを明らかにした。そして、新しい表現がどのような動機付けのもとに生まれてきたのかという点について、「-free」という接尾辞を持つ事例を中心に扱うことによって、日常言語の使用に見られる主体のダイナミックな認知プロセスの一部を解明した。

参考文献

- Arimitsu, Nami. 2003. "Negation, Opposition and Metonymic Principle," *Kansai Linguistic Society* No.23, pp.34-43.
- Croft, William and D. Alan Cruse. 2004. *Cognitive Linguistics*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Cruse, Alan D. 1986. *Lexical Semantics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Givón, Talmy. 1979. *On Understanding Grammar*. New York: Academic Press.
- Goldberg, Adel E. 1995. *Constructions*, Chicago: The University of Chicago Press. (河上誓作・早瀬尚子・谷口一美・堀田優子 (訳) 2001. 『構文文法論』、東京：研究社.)
- Horn, Laurence R. 1989. *A Natural History of Negation*. Chicago: The University of Chicago Press.
- 池上嘉彦. 1984. 『記号学への招待』、東京：岩波書店.
- Kövecses, Zoltán and Gunter Radden. 1998 "Metonymy: Developing a Cognitive Linguistic View." *Cognitive Linguistics* 9, 37-77.
- Kövecses, Zoltán 2002 *Metaphor: A Practical Introduction*: Oxford: Oxford University Press.
- 河上誓作 (編著) 1996. 『認知言語学の基礎』、東京：研究社.
- Lakoff, George and Mark Johnson. 1980. *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press. (渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸 (訳) 1980. 『レトリックと人生』、東京：大修館書店.)
- Langacker, Ronald W. 1990. *Concept, Image and Symbol*. Berlin/New York: Walter de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar*. Vol. 2, Stanford: Stanford University Press.
- Leech, Geoffrey. 1974. *Semantics: The Study of meaning*. London: Penguin books.
- Levinson, Stephen C. 1983. *Pragmatics*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Marmaridou, Sophia S. A. 2000. *Pragmatic Meaning and Cognition*, Amsterdam: John Benjamins.
- 西村義樹 (編) 2002. 『認知言語学 I』、東京：東京大学出版会.
- 野内良三. 2003. 『実践ロジカル・シンキング入門』、東京：大修館書店.
- 大堀壽雄. 2002. 『認知言語学』、東京：東京大学出版会.
- Ortony, Andrew (ed.) 1979. *Metaphor and Thought*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 佐藤信夫. 1992. 『レトリック認識』、東京：講談社学術文庫.
- 佐藤信夫. 1992. 『レトリック感覚』、東京：講談社学術文庫.
- 瀬戸賢一. 1995. 『メタファー思考』、東京：講談社現代新書.
- 瀬戸賢一. 1997. 『認識のレトリック』、東京：海鳴社.
- 谷口一美. 2003. 『認知意味論の新展開—メタファーとメトニミー—』、東京：研究社.
- Taylor, John R. 1995. *Linguistic Categorization*, Oxford: Oxford University Press.

- Taylor, John R. 2002. *Cognitive Grammar*, Oxford: Oxford University Press.
- Traugott, Elizabeth C. 1982. "From Propositional Textual and Expressive Meanings: Some Semantic-Pragmatic Aspects of Grammaticalization". In Winfred P. Lehman and Yakov Malkiel (eds.) *Perspectives on Historical Linguistics*. Pp.245-271. Amsterdam/ Philadelphia: John Benjamins.
- Voßhagen, Christian. 1999. "Opposition as a Metonymic Principle." Klaus-Uwe Panther and Günter Radden (eds.) *Metonymy in Language and Thought*, pp.289-308, Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- 山梨正明. 1986. 『発話行為』、東京：大修館書店.
- 山梨正明. 1988. 『比喩と理解』、東京：東京大学出版会.
- 山梨正明. 1995. 『認知文法論』、東京：ひつじ書房.
- 山梨正明. 2000. 『認知言語学原理』、東京：くろしお出版.
- Yamanashi, Masa-aki. 2001. "Speech-Act Constructions, Illocutionary Forces, and Conventionality." In D. Vanderveken et al. (eds.) *Essays in Speech Act Theory*. pp.225-238, Amsterdam: John Benjamins.

(2007年 9 月25日受理)